

アントニオ・アイミ 著
井上幸孝 日本語版監修 / モドリュウ・克枝 訳
『ビジュアル図解
マヤ・アステカ文化事典』

(終風舎、2020年)



メソアメリカは、現在のメキシコから中米諸国にかけて興った文明で、ヨーロッパ人と接触する16世紀まで続いた。南米のアンデス文明と並び、北中米のメソアメリカ文明は、古代アメリカに生まれた独自文明である。メソアメリカ文明の始まりは前2000年頃とされる。メキシコ湾岸のオルメカをはじめ、メキシコ中央高原のテオティワカン、オアハカ

盆地のサボテカ、ユカタン半島から中米にかけてのマヤ、メキシコ盆地を中心としたアステカ王国など様々な文明や国家がこの地域で興亡を繰り返した。本書の表題には、原題・邦題のいずれにおいても「マヤ、アステカ」が用いられているものの、実際にはこのメソアメリカ文明全体を扱う内容である。

本書は大きく5つのセクション(「主要人物」・「権力、儀式、政治」・「日常」・「神々と宗教」・「遺跡と都市」)に分けられている。各セクションには15~30の項目が含まれており、2~6ページ程を割いてふんだんな図版とともにそれぞれの項目が解説されている。

「主要人物」では、マヤの諸都市の王、歴代のアステカ(メシカ)王、ミシュテカ(ミステカ)諸王国の王らを取り上げている。「権力、儀式、政治」では、生贄や祭礼のほかメソアメリカで一般的だった神聖な球戯、有名なアステカの「太陽の石」、オルメカの巨石人頭像なども扱っている。「日常」では、誕生や死、食事、商人、司法、戦争、文字など人々の生活に密接に関連した項目が取り上げられている。「神々と宗教」では、テスカトリポカ、ケツァル

コアトル、イツァムナーフなどマヤとアステカを中心に多神教だったメソアメリカ宗教の神々が項目として挙げられている。「遺跡と都市」では、テオティワカン、テノチティラン、チチェン・イツァなどの30の都市を取り上げている。さらに、巻末には地図等のデータに加え、充実した索引(人名索引、事項索引、図版読み解き索引)が収められている。

日本語版監修の話をいただいた時、刊行スケジュールによる限られた時間もさることながら、数千年という時間幅そして日本の何倍にも及ぶ地理的範囲に栄えたメソアメリカ文明全体を見渡す広範な内容への不安でいっぱいだった。過去にメソアメリカの概説書(「メソアメリカを知るための58章」、2014年)の編者を務めたことはあったものの、実際に作業を始めてみると、自身の専門に近い後古典期後期のメキシコ中央部(アステカ王国)から離れば離れるほど苦しめられる場面が多かった。特に専門外であるマヤ語の表記には苦労したが、新たに学ぶことも多かった。15,000円(+税)という、決して手を伸ばししやすい価格の本ではないものの、オールカラーで充実した図版はずっと見ていても飽きることなくいつまでも楽しむことができ、一般の概説書では扱うことがなかなか叶わない事項の解説も充実している。本書が日本におけるメソアメリカ文明のより深い理解へのささやかな貢献となることを期待している。